

# 協 日 日 篆 篆 藝 報 報 芸

日本篆刻家協会 ニュースレター 2020.9.20 第3号  
発行 日本篆刻家協会 会長 尾崎蒼石 理事長 井谷五雲

日本篆刻家協会 563-0032 大阪府池田市石橋2-2-10-203 編集 理事 北田成磊

ご挨拶

理事長 井谷五雲

日本篆刻家協会ニュースレター「日篆協芸報」第3号をお届けします。

コロナ禍、五月に開催されるはずの第三六回日本篆刻展が事実上は作品集による誌上展となりました。また今や夏の風物詩となりました中央研究会は中止の止むなきに至りました。

さて新型コロナウイルスの現況は、第二次感染者数が少しばかり下降気味で、コロナとの共存というのでしょうか？ 経済活動の再開と歩調をあわせて、文化活動も次第に旧に復する動きを見せております。

茨城県古河市の篆刻美術館では、第一二回日本篆刻家協会役員展が開催され、先般無事に終了することができました。ご尽力いただきました篆刻美術館及び杏壇篆会の皆様にはそのご苦勞に対し、厚くお礼申し上げます。今回のニュースレターには第三回陳介祺芸術節の審査結果が掲載されておりますし、私の自宅には我が協会各印社の展覧会の案内状もいくつか届きました。その動きに力強いものを感じます。

我が協会の今後の活動として、一月に予定されています常務理事会、年明け早々の新年総会、そして第三七回日本篆刻展等、その在り方を暗中模索ではありますが、企画・運営を先生方と意見を交わしながら検討し進めているところです。コロナ禍、皆様には引き続き十分に用心していただき、その上でこのニュースレターが皆様の篆刻活動や、実作の向上につながりますことを切に願って、第三号を発行いたします。

日篆協芸報への期待

常任顧問 山下方亭

協会から「日篆協芸報」が届いた。やっと始まったかと思つた。

協会会報の刊行の年二回を、何とか四回、五回とかの発行を  
と以前より希望していたが、役員も他の仕事があり、なかなか  
実現しなかった。協会の年間行事の関係から会報は新年会  
・総会号と展覧会・夏期特別研究会号と二極化して毎年同様  
の形となる。これは協会の活動上仕方のないことではあるが、  
何か新機軸で協会のニュース以外の篆刻の情報を伝える可能  
性が欲しかった。若い方でこの状況を穴埋めしてくれる方が  
現れたことが嬉しい。

## 瓦当続編 『童大年印譜』 中の瓦当印譜

常任顧問 山下方亭

私が印譜の蒐集を始めた頃、童大年の印譜四冊を購入して、  
帙を製つて題箋を貼り、阪神の教室で梅先生にお見せした。

先生から題を書こうとおっしゃり眼の前で「童大年印譜」と隷  
書で書いて捺印までして下さった。印譜の蒐集をする同好の弟  
子が出来たと喜んでくれ、その後も何度か蒐集した印譜をお見  
せしてお願ひしたので、収蔵の印譜で梅先生の直筆の題箋が数  
冊ある。この一帙四冊のうちの一冊が「瓦当印譜」と童大年の  
題箋があり、無雙印譜も本人の題で、劍侠印譜は蒲儷著とあり、  
三冊は本人の題箋で列僊印譜は黄山寿の手になる。瓦当を印に  
刻す例は数多くあるが、この一冊全て本人の刻である。流石に  
中国印人は雅味が深い。童大年印譜は「仿古廬印留」という印  
箋があり、それを見ると、この印譜の為に製つた醒盒居士、童  
髙二十歳以後の作とあり、若い頃に完成した印譜である。「依  
古廬印留」が正式の印譜名かも知れない。梅先生の題箋を見て  
頂く為、ここでは原寸で掲載した。題箋でありながら大字のよ  
うな風格がある。これが梅先生である。(童大年については日中  
名家刻印選を参照)

ここで本題の瓦当をテーマに印譜を選んだ理由は先の真鍋副

理事長の瓦当についての数珠つなぎであって、一つのテーマを深化させ次々と意見を述べるのはいかがだろう。それによってより深く関わる瓦当を進めて頂きたい。さて瓦当は、戦国時代の半瓦当に始まり漢代に入ると円形になり文字が多くなる。篆刻には丁度、最良の資料である。一字、二字、四字がある。長樂未央・長生安樂・千秋萬歳等、定番は吉語である。我国には仏教関係の蓮華紋が多く普及して、文字瓦は寺社名等にもなるようになった。

北京には瓦当や磚のコレクターで路東之と言う方の個人の美術館があり、訪れたことがある。戦国時代、各地から出土した瓦当を地域ごとに展示していた。彼は亡くなったと聞くが、その後、美術館はどうなったのか、情報が知りたい。

【成磊補記】

路東之（一九六二〜二〇一一）室名「夢斎」、享年四九歳。書法家、詩人、古陶收藏家。古陶文明博物館館長、北京收藏家協会会員、北京作家協会会員。古陶文明博物館は一九九七年に建てられ、新石器時代彩陶及周秦漢唐陶器・戦国秦漢磚瓦・戦国秦漢封泥を中心として約三〇〇〇件以上の文物を収蔵する私立博物館。現在も開館中。古陶文明博物館：北京西城区右安門内一八号（大觀園北門旁）



◀ 路東之氏



◀ 古陶文明博物館（外観及び内観）



文房古玩 「白磁の文房具」 《その二・注水具》

副理事長 酒居石荘

注水具とは

注水、貯水の用具は文房諸具の一つ。硯に水を注ぐものとして、水滴・水盂がある。

○形状

・筆洗筆を洗うのにも使う口の広い器で、匙で水を汲む。水盤形、水盆形、水碗形、朝顔形などの形

・筆硯（筆点）筆洗の小型のもので、匙で水を汲む。

・水丞（水盂）狭義・水丞を水盂 広義・筆洗、筆硯、水丞を総称して水盂、胴がふくらみ口がややすぼまる器で、匙で水を汲む。

・水注（茶壺） 把手と注口がある。執手がつるになった土瓶形、口に蓋がある急須形などもある。茶器、急須からの転用と思われるものもある。

・水滴（硯滴）器に二つの小孔があり、一つの孔を手指で塞ぎ、開閉することにより注水孔から水を滴下させる器。円形、環形、四角形、六角形、八角形、魚・蛙・鳥等の動物、桃・石榴等の植物、家屋形など。

○材質

・陶磁器・翡翠、瑪瑙等を含む玉類・端溪石、菊花石等の石類・銅をはじめとする金属・ガラス

・七宝・象牙・犀角等の牙角・紫檀・黒檀等の木材・竹根・木根など



▲ 水注 (茶壺)

▲ 筆洗

▲ 水滴

▲ 水盂 (水盂)

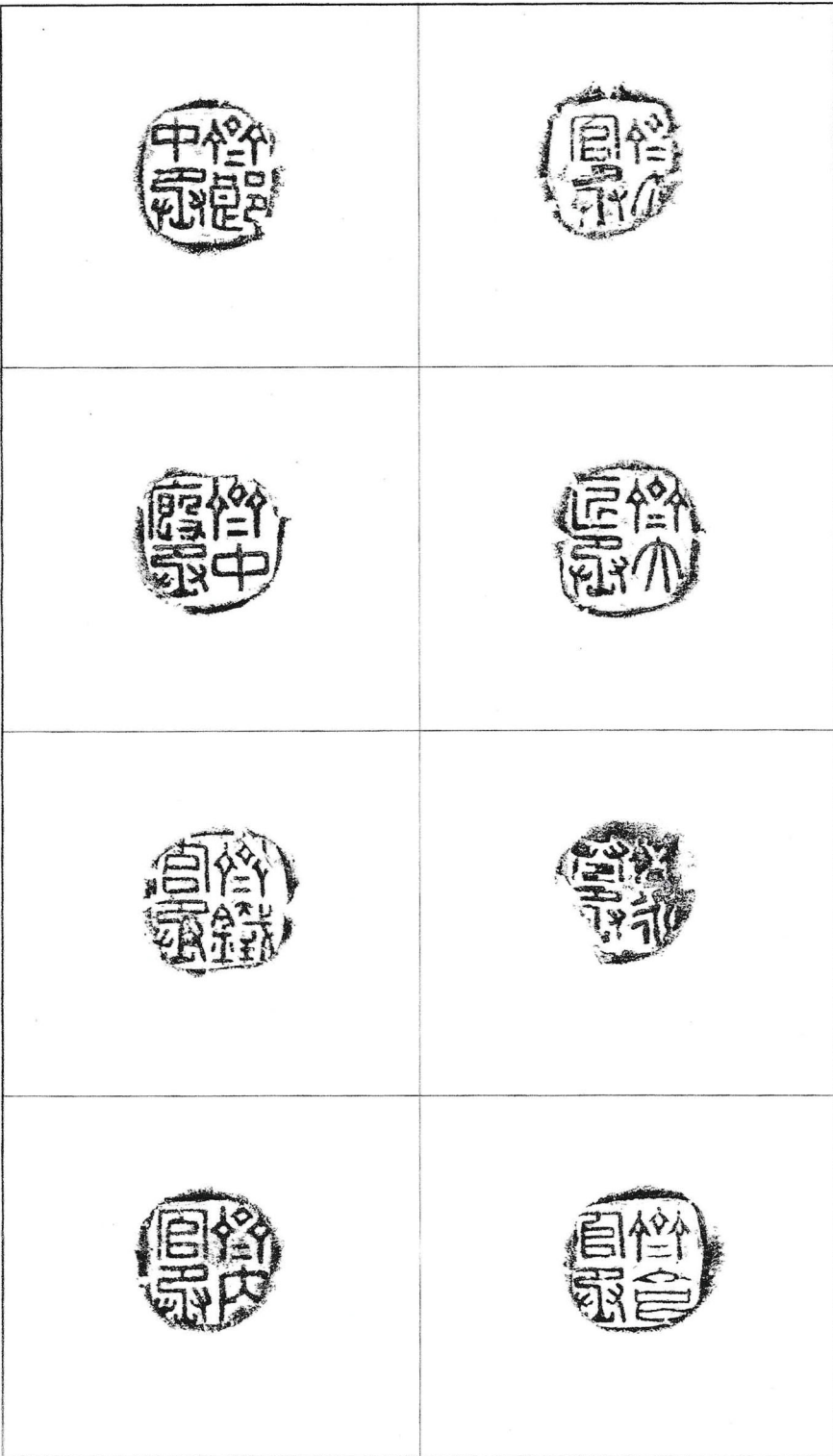


代表理事 伊藤雅夫

中国、漢及びそれ以前のまだ紙のなかったころ、木の板に墨書して（木簡）、信書としていた。その内容が外に洩れることを防ぐため、信書の往復には木簡を紐で結び、その結び目を粘土で丸めて、そこに印章を押して封じていた。封をするという本来の役目を終えて、捨てられて、また火災等で焼かれたりして、結び目に封をした証の印章を押し付けた痕が残っている土の塊、を封泥と言っている。この軟質の粘土の塊が、もし焼かれ硬化する機会がなかったならば現存は不可能であり、ある意味幸運であった。また封泥は古璽印と相表裏するもので、古代の官制を考証する上で、更に金石文の資料として、印学上でも重視されている。

封泥の古朴な風趣を初めて篆刻に採り入れたのは呉昌碩といわれ、現代でもさまざまな形で、封泥にヒントを得たと思われる篆刻作品が発表されている。篆刻をする上でも重要な意義を持つていることは改めて言うまでもない。

◀ 齊魯封泥攻存（部分）



齊魯封泥攻存

## 第三六回日本篆刻展 授賞式中止

褒賞部 代表理事 渡邊和琴

前回のニュースレターにて、展覧会部長黒田玉洲先生より、第三六回展の審査、展覧会の件、第三七回展の予定についてのご報告がありました。褒賞部より授賞式の中止、そして本年度より変更になりました件をご報告させていただきます。

一、寄託賞が今までの六賞に加え、本年度より「原田の森ギャラリー館長賞」をいただきました。

一、特選、秀作賞、会員推薦賞、入選証の賞状が変わりました。協会で印刷して、証書ファイルに挟み、賞品も毎年印材をお渡ししておりましたが詩箋にして郵送させていただきます。

受賞されました方の笑顔、高校生の喜びの初々しいお顔が拝見できなかったこと、懇親会では、来賓、受賞者、会員を交えての歓談できる場がもてなかったこととても残念でした。

六月に自粛が解除され、夏には落ち着くのではと言われてきましたが、新型コロナウイルスウィルスの感染者数は七月に入り全国各地で日々拡大しており、まだまだ不安が続いております。来年第三七回展は是非開催されますように切に願っております。

## 広報部からお知らせ

広報部 常務理事 池田泥異

会員の皆様におかれましては、コロナ禍の中いかがお過ごしでしょうか。

さて、新型コロナウイルス感染拡大防止による様々な活動自粛に伴い、本協会はじめ各印社様も活動を自粛されておられるとのことで、「会報」に掲載するべき記事がない状況でございます。つきましては、本来この時期に発行する会報を休刊とし、月例課題コーナーをニュースレター誌にお願いすることになりましたこと、ご了承くださいますようお願い申し上げます。

また、来年度課題は次号ニュースレター誌に掲載予定です。感染数が減少傾向であるとはいえ、まだまだ予断を許さない状況ではあります。みなさんで「アマビエ」の印を刻し、疫病退散祈願はいかがでしょうか。

## 第三回 陳介棋芸術節審査結果発表

副理事長 喜多芳邑

陳介棋賞 音川景香

優秀賞 杉本加世 北田成磊 関踏青 石留之然

入選 山本龍石 畔原小華 石川無外 吉田草心 大野勝山

木村佳史 中島幸園 本郷紫香 大林蒼樹 八木壽石

中森紫香 大城容史子 今村董圃 古野燕安 戸出九廬

保田昌石 萬谷碧風 武田黎秀 橋本游月 安井芳泉

坂正歩 藤井郁子 東尾高岳 畑間青露 松井亘邨 寺地寿和子

皆様の出品のおかげを持ちまして、今回も本会より多くの入賞・入選がございました。おめでとうございます。



▶ 現地審査風景